

## 序

哲学とは何かという問いに対して正確に答えることは難しい。だが、古代ギリシアにおいて「フィロソフィア」と呼ばれる営みが始められたとき、それがいくつかの重要な側面のうちの一つとして「存在に関する思索」という側面を有していたこと、これは確かであると思われる。考えるに、我々が知っている数え切れないほどの問題の中で「存在」は最も根本的な問題である。というのも、問題とみなされる物事は皆、存在するからこそ問題となりうるのであって、もし存在しないのであれば、問題とされることもないからである。一般的に言って、すべては存在する限りにおいて何かでありえるのであり、そもそも存在しないのであれば、何ものでもありえない。

このように、「存在」は根本である。このことに気づくや、人はそれについてもっと突き詰めて考えてみたくなる。試しに我々は、ここで或る事物、例えば机が存在するという事について少し考えてみよう。今仮に我々の机は木製だとする。するとすぐに思い当たるのは、その机の存在は、それに先立つ木の存在に依拠しているであろうということである。木製の机は、木が存在するからこそ存在するのであって、木が存在しないのであれば、木製の机も存在しないと言えよう。だが、そうなる当然、次にはその木もまた、それに先立つ何かが存在するからこそ存在するのではないかと思われてこよう。その場合、木に先立つ何かというのは、例えば大地・日光・水分・大気といったところであろうか。しかし、ここまで来るならばもちろん、土・火・水・気といった元素に満足することなく、それらよりもさらに先に存在する何かへと思いを馳せたくなるであろう。こうして探求は先へ先へと進んで行き、「始めに存在するもの」に辿り着くまでいつまでも尽きるということがない。

けれども、少々考えてみれば明らかなように、以上とは正反対の方向への探求も可能である。すなわち、机の存在の後には一体何が存在するであろうかと問うことがそれである。長い年月を経るならば、机はやがて崩壊するであろう。その時には、もはや机ではなく、ただの木材の断片が存在することになるであろう。だがさらに、その木材までもが腐敗したらどうなるのであろうか。その場合、代わりに土や塵などが存在することになるであろう。では土や塵の後には一体何が存在するというのであろうか。我々はきつこう問いたくなり、こうしてこちらの探求もまたどこまでも進んで行く。ただし、こちらが目指すのは「終りに存在するもの」なのであるが。

ところで、このように考えてみると、或ることに気づかざるをえない。それはすなわち、始めに存在するものと終りに存在するものとは同じ一つのものであろうということである。我々は次のように言ってみたくなる。—我々が普段目にしている諸々の事物、これらはすべて始めに存在するものからの派生物にすぎないのではないか。始めに存在するものは、今現在のところ我々に馴染みの事物という見せ掛けの姿を取っている。しかし、長い年月がたってすべてが崩壊する時には、それは終りに存在するものとして現れるのではないか。我々が見知っている事物というのは、要するにすべて幻にすぎないのかもしれない。というのも、それらは遥か以前には存在しなかったし、遥か以後にも存在しないであろうから。けれども、そうした幻のごとき事物の向こうには、世の始まりから終りまで、ずっと存在し続ける何かがあるにちがいない。そのような何かは、幻との対比において、「真に存在するもの」、あるいはもっと簡単に「実在」と呼ばれてしか

るべきであろう。

真に存在するものの探求が盛んに行われた場所としては、何にもまして古代ギリシアの地が名高い。しかし、そうした探求はギリシアに特殊な営みだったわけではなく、程度に差こそあれども、他の様々な地域においても試みられていたように思われる。真に存在するものの探索は、非常に長い間、人類の共通事業であったであろう。様々な探求からは、様々な世界像が生み出され、それら多様な世界像の並存という条件の下で、探求は少しずつ進められていった。

こうした状況に大きな変化が生じたのは西ヨーロッパで「近代」と呼ばれる時代が始まった時である。近代西欧において、真に存在するものの探求は、各人の好き勝手な空想の類にすぎないのではないかと疑われるようになるのである。もっとも、こうした疑惑はこの時になって初めて提出されたわけではない。この種の疑念はこれまでもいく度となく表明されてきた。しかしながら、それらはどれも近代西欧における懐疑ほど執拗ではなく、それゆえまた、決定的でもなかった。近代の懐疑は探求の伝統を徹底的に破壊し、その継承はもはや不可能と思われるほどであった。近代西欧において真に存在するものは廃棄され、後にはただ幻としての世界だけが残されたのである。

一つ言い添えておこならば、近代西欧はおそらく、当初から探求の伝統の断絶を意図していたわけではない。それが望んでいたのは単に混乱の收拾であったように思われる。近代西欧的な観点からすれば、それまでの探求は互いに相容れない様々な説の乱立状態以上のものではなかった。そこで近代西欧は、まずそれらをすべて否定し、その上で最終的な正答を提示しようとしたのである。この狙い自体はそれほど間違っていなかったように思われる。だが問題は、その目論みが実際には前半部分しか成功しなかったという点にある。確かに近代西欧は真に存在するものを消去し、世界を幻に変えてしまった。しかし、それは意図せざる結果であったと言うべきであろう。

「世界は幻影にすぎない」。この命題は受け容れ難い。なぜならば、自然な感覚に従うならば、世界には確固たる実在性が備わっているように思われるからである。そうだとすればやはり、世界のどこかに真に存在するものを見出すべきなのではないだろうか。しかし、既存のどのような真に存在するものを持ち出しても、それらは悉く近代的懐疑によって退けられてしまうにちがいない。近代人とは、いわば幻影としての世界の囚人なのである。この世界から脱け出す方法の一つしかない。それはすなわち、近代的懐疑に打ち勝つほどに確実な、まったく新しい真に存在するものを発見することである。西欧がこの課題に本格的に取り組み始めたのは19世紀後半ぐらいからではないだろうか。

西欧の懐疑は西欧自身を苦しめたが、それだけに止まらず、非西欧をも苦しめることになった。近代的な疑念は他の諸地域にも伝播し、それらの地における真に存在するものの探求の伝統にも襲いかかったのである。最初非西欧の多くは、西欧伝来の懐疑を排除し、自らの伝統を墨守しようとした。しかし、やがて非西欧の一部は、そうした後ろ向きの抵抗が無益なことを悟り、懐疑を無視するのではなく、それを克服するという積極的な方向へと転じた。こうした転換が行われたのはやはり19世紀後半ではなからうか。新大陸の北アメリカ、またロシア、ポーランド、チェコ等の東ヨーロッパ、そして日本などにおいて、そのような試みの例がいくつか見受けられるように思われる。それらはどれも皆、貴重な実例として興味深く、それぞれが詳細な専門的研究に値する。だが、我々はそれらの中で特にロシアにおける試みに関心を向けようと思うのである。

西欧で近代的な疑念が芽生えてから少し後、18世紀の中頃ぐらいには、ロシアもまたそうした懐疑にさらされるようになっていた。とはいえ、ロシアではその後、近代思想は危険視され、遠ざけられる傾向にあったため、近代の懐疑と正面から向き合う機会はロシアにはなかなか訪れなかった。しかし、19世紀半ばを過ぎると、この地でも近代西欧の哲学が本格的に研究されるようになり、その結果として、近代の懐疑を自らの問題として受け止め、これを克服しようという機運が生じる。ロシアにおける試みが一定の成果を上げたのは19世紀終りから20世紀初めにかけての時期であろう。こうしたロシアの歩みは全体として重要であるが、そのすべてを跡づけることは望むべくもない。我々は或る一人の哲学者を選び出し、彼の思索の過程を追うことを通じて、ロシアにおける試みがいかになされたかを垣間見るという方策を採ろうと思う。我々が選ぶ哲学者、それはグスタフ・グスタヴォヴィチ・シュペート (Густав Густавович Шпет 1879-1937) である。

シュペートは現在、ロシアではすでに著名であり、欧米でもかなりの程度知られている。しかし日本では、彼は未だにほぼ無名と言ってよいだろう。日本における彼の知名度が高いわけではない以上、彼の思索の跡を辿ることを通じて、ロシアにおける近代的懐疑の克服の試みについて考えようとする我々の考察は、以下のようなやや迂遠な道を進まざるをえない。

まず第1部において、我々はシュペートの生涯と思想を概観する。これは以下の三つの部分、①シュペートの生涯、②先行研究史(シュペート再評価のプロセス)、③彼の思索の時期区分および全体像からなる。③において我々はシュペートの思索を1) 修学期(1901年—1910年)、2) 構想期(1910年—1916年)、3) 展開期(1917年—1929年)に区分する。そして我々は2) 構想期に関心を集める。なぜならば、近代西欧的な懐疑を受け止め、これに対して何らかの解決案を提出しようという努力が、この時期に最も顕著に見られるからである。

続いて第2部において、我々は構想期に属するシュペートの著作を詳しく検討する。構想期のいくつかの著作のうち、我々は次の三つ、「ヒュームの懐疑論と独断論」(1911年)、「心理学の一つの道、それはどこへ通じるのか」(1912年)、『現象と意味』(1914年)を選び出す。これらはそれぞれ①懐疑を受け止める、②解決案の発想を得る、③案を仕上げるという段階にあたっている。

ともかく、まず我々はシュペートの生涯と思想のおおよそを知ることから始めよう。